

『力餅』と『ハムレット』

——藤村童話から——

富田和子

はじめに

『力餅』^(注1)は、昭和15（一九四〇）年、藤村69歳の時の作品で、「はしがき」に「わたしたち一生の旅の間には、いくつかの峠も待ってゐます。あんまりお腹が空いてゐては、険しい路のよちのぼれるものでもありません。いさゝかの力餅が、さういふ時のわたしたちを力づけて呉れます。まあ、この小さな本は、わたしが皆さんのために用意した力餅で、ほんのこゝろざしばかりの贈り物なのです。」と記し、元氣や勇氣の源になるようにと願つて、『力餅』の後に「この本は作者の年若い頃からいろいろな人に逢つて見たお話を中心にして、その前後に十と十二のお話を添へてあります。」とあり、第一章「十の話」・第二章「母を思ふ」・第三章「二つ雷さまその他」・第四章「教師はお友達の中にも」・第五章「宮城野」・第六章「姉」・第七章「浅間の麓」・第八章「十二の話」に分けた85話からなつて

いる。(本文引用の際、旧漢字体は新漢字体に改め、促音表記は現行の小文字表記に改め、ルビは省略した。以下、同じ。)

更に、「この本の中には、第二章第十一話の『白い狗の話』のやうに古い伝説をもとにして書いたものもあり、第八章第十話の『新しい建築の話』のやうに独逸の詩人ゲーテの言葉から思ひついて書いたものもあります。」と、自分の体験からではないけれど、見聞から想像力を働かせて書いたものもあると述べる。

明治時代の作家の多くが、西洋文学の影響を受け、藤村も、日本古典文学の影響のみならず、西洋文学の影響を受けていることは周知のことである。

さて、シェークスピアの作品の内、『ハムレット』は特に藤村の小説『破戒』への影響を指摘される。パラドックスに陥って苦悩する青年像を描くことは、別な視点からとらえると、青年のために試みる自己表現の代弁といえよう。彼の西洋文学の影響を童話にまで広げ、藤村童話の内、青年期の体験を題材とした『力餅』への『ハムレット』の内面的な影響をよみとり、表現しようとしたところを検討したい。

なお、パラドックスを「未来、行為、精神といった、いわば人間の主体的側面が、対象的世界とかかわったところに生ずるパラドックス」^(注2)「一般的にいえることは、科学的、とくに物理学的世界像は、世界を与えられ、決まったものとみなすという根本的な性格をそなえ、これが、事物を創つてゆくという、主体的・精神的ではあるがむしろ常識的な人間のとらえ方を包み切れないので、パラドックスを生じたということである。パラドックス発生の原因は、むしろ一面的な世界の見方である」^(注2)とみて考察する。

一 ハムレットの苦悩の内実と実態から

まず、ハムレットの苦悩の内実について、簡単に列挙すると次の通りであろう。() 内の数字は、『ハムレット』岩波文庫のページ数。引用に際し、傍点も省略した。以下同じ。

① ウィテンベルクへ再び留学したいが、クローディアスとガートルードは反対(23頁)。即位の望みを邪魔された(167頁)。

② 敬愛する父、国王の没後わずか二ヶ月で、母が叔父と再婚。この不快な思いを、胸が張りさけても、国全体の安全と福祉のために、黙っていなければならない。(24・30頁)

③ 父の亡霊に「あだを打ち果せよ。」と言われ約束する(40頁)。

④ 因循として復讐を実行できないばかりか、一言の怨も言えないで、文句ばかり並べて心の憂さを晴らしているだけの状況を『卑劣な男だ』『わが身が恥かしい。』と嘆いている。(77・127頁)

⑤ 「あの亡霊は悪魔かも知れない。…亡霊よりもっと確かな証拠が欲しい。」と、仇討ち実行を躊躇する理由を見つけ、より正当な理由を見出そうとする(78頁)。

⑥ オフェリアに真実を話せず、「わたしの一切の罪障消滅を、祈っておかれよ。」と心の中でしか言えない。(83頁) ハムレットは、デンマークのたった一人の王子であり、功名心を持つ若者で〔①〕、ホレーシオという親友とオフェリアというまだ互いに打ち解けあっていない恋しい女性があり、真実を話せない〔⑥〕。王子の身分のため、国全体の

安全と福祉のために思うことも言えない〔②〕。父の死を発端にハムレットの取るべき行動に与えた指示が要になって話が進み、その父は夢枕に立つのではなく、深夜に亡霊として現れる。父の亡霊から託された復讐を実行しようとするが〔③〕、躊躇ばかりしている〔④⑤〕。ある事件を機会に復讐を遂げる。

ハムレットが、デンマーク王のたった一人の王子であるという事実は、彼自身、認める事実であり、他の登場人物も認める事実で、更に観客（読者）も認め、彼がパロックスに陥った原因となっている。

父の急死という予測できなかった受け入れがたい現実をきっかけに、たった一人の王子なら、国王亡き後、王位を継承し次期国王に即位するであろうという誰もの予測に反して、ハムレットの科白の通り、「横合いからはいつて来て、ぼくの即位の望みを邪魔」〔①〕され、その上、その男と母があつさり再婚してしまった〔②〕。彼はこれらの現実を受け入れることができなかった。

彼は、予測できなかった受け入れがたい現実にある理由を追及すればするほど、戴冠式を済ませ国王となったクローディアスへの嫌悪感がつるばかりで、おめたい儀式で喪服を着るといふ行動になり、その感情は「親類以上だが、情愛は親類以下のくせに。」（21頁）の科白に現れ、母の再婚を非難する言葉になる。

たしかに、暗殺計画のあったことを知らない者にとって、国王が急死し、クローディアスが国王となったことは、いわば突然の異変である。とはいえ、領土を狙う国が周辺にあり、早急に軍国の主権を掌握し対応せねばならない。

ハムレットを王に立てることより、再婚し、后でいることを選択したガートルードは、その行動が自由な意志によるものなのか、必然な行為であったのかは演出家の解釈に委ねるとしても、彼女は現実自らを適応させたのである。これに対し、オフェリアがいう「すぐれて気高い御気象」。大宮人の眉目美しさと、学者の弁舌と、剣を取っては軍人も及ばぬ手並と、三拍子そろうたお方。この国の望みでも飾りでもあった。流行の鏡、作法の典型、眼のあ

る人の眼に止まるお方……。またとないあの氣高い御理性……。こよなく立派なお姿……。」(85頁)のハムレットは、予測できなかった受け入れがたい現実という一面的な世界の見方、常識に狂わされて適応できず、「よくないことだ、断じてよいことにはならないぞ!」しかし、待て、この胸が張りきけても、おれは黙ってなければならぬわ。」(24頁)という分別を持ちながらも、亡霊の出現で嫌悪感復讐心にかわり、「世の中は調子はずれた。あ、なんという悪因縁か! おれがそれを直す役廻りに生れて来たなんて!」(47頁)と予感する。

そして、「ぼくは胸騒ぎがしてくる。」(27頁)「父君の亡霊が甲冑に身を固めて! なんがあるんだ。なんか、けしからん事があるんだ。」(29頁)「おれの運命が呼んでいるわい。」(38頁)これらの予感は、これからの行動が自由意志による自発的な行為ではなく、必然によつて支配されていると観客(読者)に連想させる。

「あの亡霊は悪魔かも知れない。……そうだ、悪魔はおれの氣の弱さと憂うつに乗じて……おれを手玉にとつて地獄に陥れようとしているのかも知れない。……そうだ、芝居こそ、王の良心をわなにかけるのに、もつてこいの手段だ。」(78頁)ここでは、置かれている現実を自覚しそうになるが、必然によつて押さえ込まれ、「生きるか、死ぬるか、そこが問題なのだ。」(82頁)と自問しながらも、ついに「胸のこの辺一帯が、きょうは妙に心持が悪いよ。」「予感だね。」「いや、ちつとも病氣じゃない……覚悟さえきめておればそれでよい。人間はどうせなんにもあの世へは携えて行くことが出来ぬような、仮の宿りをこの世にしておるのだから、……」(114頁)ここに至つては、受け入れがたい現実を超越しているが、ハムレット自身はそれに氣付いていない。

狂った真似をして語る科白、「いや、その暇ぐらい、ぼくが喜んで進上したいものは他には何もないよ——ただ例外はぼくの命だけだ、ぼくの命だ、ぼくの命。」(63頁)は、本心であろうし、「たとえ君が氷や雪のように清純無垢であらうと、世間の悪口はまぬかれないぞ。尼寺へ行け、尼寺へ。きょうなら。」(85頁)この科白は予告となつて、オ

フエリアは清純無垢のまま浮世を去ってしまう。

突然変異であるクローディアスの国王即位もガートルードの適応も、デンマークにとって、最良の変異ではなかったため、淘汰され、ハムレットもついに国王に即位できず、そして、死に際に、フォーティンbrasがポーランド征服後、帰国途中に、イギリス使節と共に来るといふ報告を受け、親の仇討ちのことを正しく説明してくれと、ホレーシオに託して、「ぼくの亡き後の国王選挙には、フォーティンbrasが当選すると云う予言だけはしておくよ。」(182頁)と、デンマークの将来を託す役割のみ与えられ、新しい時代の到来を告げて、終幕へと進む。

パドックスに陥った青年ハムレットの苦悩の実態は、群雄割拠の時代に、自覚しないが、自由意志を求める深層に内在する気高い理性が、突然変異のもたらした必然と抵抗したものであり、束縛が発端となつて、最後は新しい時代の到来を感じさせて終わっている。

また、描写の手法は、シェイクスピアは観客の想像力をはてしなく広げるために、せりふを大切にし、せりふが詩のように美しいと評され、「主人公ハムレットが狂人を装っている時は散文で喋り、独白の場面では格調ある文体のせりふで語る。」と指摘されるなど、心情の描写に美しい表現技法を巧みに使っている。^(注4)

二 『力餅』から

最初の話は、第一章「時計の話」で、「スピード時代」の到来を話題にして、『さうみんな同じやうに動いたら、何も動かないやうに見えますよ。…静かに立ってゐるものがあればこそ、他のものの速いか遅いかもはっきり分りま

すよ。…わたしは急ぎもしなければ、休みもしません。…生徒さん、どんなスピード時代が来ても、時計はこれでい、と思ひますよ。』」の話ではじまる。

これが出版された昭和15年頃は、ヨーロッパでは前年9月に第二次世界大戦が始まって、日本でも軍部の勢いが盛んで、7月に軍部が推す第二次近衛文麿内閣が成立している。

次の二「蛙の声」は、「声を出すのは楽しいものであるのに、蛙仲間はずから出て来たばかりで、まだ唄一つうたへませんでした。みんな田圃のわきや小川のほとりで低い声で鳴いてゐました。一匹の蛙がありまして、どうかしてもつと声を出したいと思ひましたが、それが思ふやうに出て来ません。仲間のものはと、見廻しますと、いづれも低い小さな声で鳴いてゐまして、…。鳥ですら藪のかげなぞに隠れてゐて、どっちを向いて見ても、声を出すものは少く、たゞたゞ冷たい風がヒュウヒュウ、空をうなつて通るばかり。…よけいに蛙はちひさくなつて、出したいと思ふ声までが咽喉のところへひからびついたやうになりました。」と、これから日本も、第二次世界大戦に参戦する時代を暗示するかのような始まり方をしている。

藤村は、ヨーロッパで第一次世界大戦がはじまった大正3（一九一四）年、43歳の時、パリにいた経験をもっている。

「先づ声を出せ。」「蛙が鳥の真似をしてゐたのでは、どうしても駄目で、自分には自分の持つて生まれた声がある、そこへ蛙も気がついたのです。」と、話は続く。とはいへ、藤村は子供達のために童話を書くとしたのであり、「藤村童話叢書」巻末に「少年のためにも著作をしたい心から、新たに、力餅一篇を書きました…」。人の一生はほとんどその少年期で決すると言つてもいい、ことに想ひ到れば、かうした少年の読本をつくることは、著者にとりても楽しい仕事に思はれます。」と記すように、これ以上の世相批判を匂わせず、この先には、親不孝な青蛙の話を挿入し、「一

緒に唄の一つもうたはうではないかと言ひ励ましました。それから二匹の蛙が一緒に声をそろへて鳴き出しましたら、それまで、低い小さな声しか出せなかった蛙仲間までが我も我もと声を合はせます。…その声は遠くまでだんだんひろがって行きまして、いつの間にか谷の中は蛙の声で一ぱいになりました。」と、前途に希望の持てるまとめ方をしている。

四「蟬の送別会」では、「いよいよ蟬も暗い土の中から出て行くこととなり、古い殻を脱ぎ捨てる時が来ました。」。蚯蚓の送別の辞に、「蟬は同じ穴の中にはかり眠ってゐたやうに見えたが、今日になって見るとそれが長い長い支度であつたことが分かりました。土に住むものは皆、古い穴に満足してゐる中で、殻を破つて出て行かうと思ひ立つた蟬の勇氣には感心します。」と賛辞するものの、閉会后、「いろいろなことを言ふものが出て来ました。『あんなことで蟬が飛べるか知らん。』と言ふのは鼠でした。『蟬はすこし思ひあがつてゐるのじやなからうか。』と言って見るのは蟻でした。」蟬を心配して言い出した批判であらうが、世間でもよくあること。「この蟬はまだ若くて、光を求めずにはゐられなかつたのです。そろそろ穴から這い出して、思ひきつて古い殻を脱ぎ捨てた時は、まだ高い声で鳴くことも知らず、樹と樹の間を飛び廻ることも知りません。にはかに明るいところへ出て見ると、眼もくらむばかり。新しく生まれたばかりの蟬は、青い透きとほるやうな羽もまだ弱くて、たゞたゞ静かにそこいらを這ひ廻りました。」と、擁護するが、颯爽としたかっこいい旅立ちとして書かれてはいない。

第三章三「近江の刀鍛冶」では、「人の一生は不思議なものです。来助老人のやうな刀鍛冶が近江の片田舎に埋れざりになつてしまはないで、また東京に出る目を迎へようなどは、老人自身ですら夢にも思はなかつたことでせう。日清戦争が来て見ると、来助老人のやうな人の腕の役に立つ時がもう一度来たのです。…おそらく来助老人のやうに、一生を刀の道にさ、げつくして、この世を歩めば歩むほど明るいところへ出て行つた刀鍛冶も稀でせう。」

ここでは日清戦争を批判する様子はなく、「人の一生は不思議なもの」と紹介する。

明治5年生まれの藤村は、日清・日露・第一次世界大戦の時代の空気を知っており、そして、第二次世界大戦が終結する以前の昭和18年に亡くなっているため、敗戦を知らない。

第三章五「栗本先生」では、「物にさきがけするのと、しんがりをつとめるのでは、どっちが勇気が要るでせう。前の方の人は進んで刺のある茨の道を切り開いて行くのですから、勇気がなくては叶はないことですが、後の方の人として勇気が要ることにかけてはそれに劣りません。」とはじまり、「事情があつて北海道の方へやられ、函館奉行組頭といふ役目につきました。当時の函館あたりはまだ『蝦夷地』と言ひまして、開けたばかりのさみしいところでしたが、先生は六年もそのさみしいところに辛抱して、病院や医学所を建てたり、薬草園を開いたり、松杉その他の木の苗を内地から移し植ゑさせたりしました。…栗本先生の長い生涯にとって、この函館時代の六年は好い支度の時でありましたらう。…その六年の間に先生がいろいろやつて見たことは、それから江戸に出てもっと大きな舞台へ乗り出して行つた時の役に立ちました。…先生は自分の失敗までも役に立てることを知つてゐましたよ。」

栗本先生とは、江戸生まれの幕臣栗本鋤雲（文政5一八二三―明治30一八九七）のことで、函館奉行組頭の他、親仏政策を推進して、外交交渉にあたり、外国奉行としてフランスに渡つた。維新後は隠退し、明治6年から郵便報知新聞の編集主任をした新聞記者である。（『平凡社大百科事典』^{（注6）}）藤村は彼のことを、予測できなかった受入れ難い現実をきっかけに、辛抱し、開拓し、「新しい日本のためにいろいろ支度し」と紹介する。

第五章九「耳の好い人」では、「仙台に来て弱つたことは、言葉の訛りの多いことでした。…仙台のやうな都会ですらこの通りですから、まして荒浜のあたりに住む人達の言葉には土地の訛りも濃い。…荒浜の漁師達の言ふことは、それら（内務省）の役人や医者はおろか、仙台から附いて行つた人にすらよく聴き取れなかつたさうです。…そんな

漁師言葉の通弁を誰がつとめたかと言ひますに、その耳の好い人は最早三十年近くも仙台地方に住む外国の宣教師でした。」(一)内は、富田が補った。

藤村が仙台の東北学院で教えたのは明治29年9月から翌年7月までのこと(注7)で、明治28年にはコレラが大流行したことから窺うと、この外国の宣教師は明治の初め頃から仙台地方に住んで、辛抱強く布教活動を続けた結果、訛りの濃い漁師言葉の通弁ができて、役にたったと紹介する。

第七章一一「書物は野にも河原にも」では、「三年ほどの約束で来たわたしの前には、別の世界がひらけて行きました。ほんとに読まうときへ思へば書物はわたしの行く先にありました。野にも河原にもありました。到頭、七年も辛抱して、隣のをばさんからも、生徒の父兄からも、学校の小使からも、麦畠に出て働いてゐるお百姓からも物を学びました。わたしは教師として行き、生徒として帰りました。」

藤村自身が、田舎で辛抱したと語る。

第八章一一「二人の旅人の問答」では、「誰しも若いうちは失敗なぞを恐れないで、思ひきつて彷徨つて見るくらゐがいゝ。さう遠いところへばかり眼を着けないで、自分の足許をよく見るがいゝ。お前の探さうと思ふものは、きつと手近なところに隠れてゐる。お前はお前で踏み出して見るがいゝ。」

どんな状況でも、若い内は失敗を恐れないで、自分の足許をよく見て、と励ます。

最後の話である第八章一二「ほゝづき」では、「このほゝづきを鳴るようにして下さい。」と小娘が母親のところへ来たのをきっかけに、「その時、娘は母親から好い音のする玩具を頂いたばかりでなく、一ぱいに種のつまった酸漿は反つて鳴らないで、穴をあけ、種を取り去り、中身を空しくさへすれば、そんなによく鳴ることを教はりました。」と、一つ一つ噛み締めるようにまとめる。

まとめ

ルコントデユ・ヌイは『人間の運命』^(注9)第15章で、人間が常に向上心に燃えて進歩し、幸福を得るには、幼少期の躰による人間の尊厳を教える徳育と蓄積された知識を吸収させる知育を、子供個人の知的成長に応じて教育することが不可欠で、今、これを、全世界で必要とされる誠実と公平によって人間の脳が受けたなら、誰もが持っている動物的な本能をコントロールし、偏見を排除し、理想的な進歩を遂げることができようと述べる。

藤村もまた「本といふものはその中に書いてあることがすっかり解らなくても、解らないことは解らないなりにとめて、読んで見て頂くのがいい、かと思はれます。……今すぐそれが皆さんの背丈に合はないまでも、すこしたって、また取り出して見て下さるなら、きつと『うん、ちゃうど、いゝ』と言って下さるときもまゐりませう。皆さんは、ずんずん大きくなるさかりですから。」(『力餅』の後に)と、何度でも繰り返して読んで欲しいと期待し、成長に応じて理解できるようになればよいと記す。

『ハムレット』は、身近かに戦争の緊張感のある時代を映しており、受入れ難い現実がパラドックスを発生させ、「言葉、言葉、言葉。」(62頁)の有名な台詞が象徴するように、ハムレットには力餅をさしいれる人がいなかったために悲劇となった。また、偏見を排除し、人間として理想的な進歩を求め、持つて生まれた自然の性質が否定される人間性と未来に新しく培おうとする人間性の間で苦悩した丑松を描き、『ハムレット』同様に新しい時代の到来を予告して終わる『破戒』とは違って、『をさなものがたり』(大正13年刊)の後、長い間をあけて書かれた『力餅』は、藤村が

新しい時代の進む中で、子供達が声を出して、失敗を恐れないで勇氣を持って生きようとする時、辛抱強く、パラドックスに陥らないようにと、さしいれる力餅を童話の形式で表現しよう試みたのである。

また飛田文雄は、『力餅』『はしがき』の「ひとり自分の子供等に話しかけるばかりでなく、広く世の幼い人達にも、またその親達にも読んで見て貰はうといふ心を持つやうになったのです。」の中で、「注目したいのは、『その親達にも』ということばです。…（この）ことばの指さす方向は、『飯倉だより』の『童話』の章の結びに、『…童話の世界はさう窮屈なものではなくて、いつまでも今日のやうな自由な舞台として置きたい。』とあります考え方の一つの実践だとも言えましよう^(注10)。」と、述べられる。

教訓的・教育的に捉えられがちな藤村の童話ではあるが、青春の中でハムレットのような悲劇を避けて、元氣を取り戻すため、新しい時代が到来する中で、『力餅』は「自由な舞台」に生きるための表現を試みたものであろう。

(平成十一年十月)

注

- (注1) 『藤村全集』10 筑摩書房 昭42 所収
- (注2) 『パラドックス―論理分析への招待』中村秀吉 中公新書297 中央公論社 昭47年初版・昭62年25版 212頁
- (注3) 市川三喜・松浦嘉一訳 一九四九一刷・一九五七19刷改版・一九九八75刷
- (注4) 『演劇への手びき コトバ・ことば・言葉』本島勲 桐原書店 一九九九 73頁・76頁。
- (注5) 注1と同書。五二二頁
- (注6) 平凡社 一九八四初版
- (注7) 『藤村書誌』普及版 伊東一夫 国書刊行会 昭48 年譜による。
- (注8) 『近代日本総合年表』第三版 岩波書店 一九六八第一版・一九九一第三版

『力餅』と『ハムレット』

(注9) 渡部昇一訳 三笠書房 一九九四²刷

(注10) 『藤村の童話―その位置と系譜―』 双文社出版 昭58 232頁

付記

この課題に対し、梶山女学園大学振興会より平成11年度研究奨励補助金をいただきました。